

第四章
沿革名稱

第二節 各大字の起原沿革

一、大字 豊田

豊田區は御供所、奈良子、小折新田、九郎右工門新田、三右工門新田となつてゐる。

「尾張國地名考」に依ると今の御供所を御供所村として中に五五所といふは言便なり、一に御供所とも書、村名初めより字音なり。

地名未考

いにしへ景行天皇は淡海國志賀の都より三野國加兒郡の泳の池へ越させ給ふの事あり。若くは其時此地もや過らせたまひけん御饗もや備へ奉りけむ、今よりはしられず後の人なほ考ふべし云々とある。

「尾張誌」に依つて見ると

御供所村、長櫻村の西北名古屋より五里西北なり。高雄莊なり。むかし大縣宮——今二宮と稱す——の御神供を調して奉りし地なるべしとある。

更に「大久地古事記」を見ると

後小松帝應永三十癸卯年七月足利義量軍を引て西國に行かんと、春日井郡飛熊山（小牧山のこと）に登て陣を張り候は、其の夜俄に西の方より黒雲起り風烈激吹き雨頻に盆を傾け音轟々と鳴來る中霹靂に勢猛し甚しく、義量大將考へ居り應探りて軍兵に命して、宜く鳴動は雷に等しむいへごも雷に非ず、自分考ふに魔王變化之物なりと思ふに困て、宙天を的と定め弓矢放つべしと命を下す。

答へて十騎斗りの人々は矢を放つに從て其黒雲段々と西へ逃行き天は晴渡るに大將は直ちに馬に跨り、大音を發し進兵之應配に各々五百騎ばかり箭先き揃へ西へ西へと進み行事凡一里半余も行くに、大口村瀉田瀉之南葭原の上に雪止るに頻に雷の如くに鳴るに、軍兵は大將の命に違つて萌心の中を的に射る事雨の如く、左すれば益々雷鳴偉に電り兵の眼を突く、砂水は小石に交りて激激或は颯烈彈丸奔しり軍勢に向つて黒雲段々に押出すより大將は齒を嚙み、飯せ歸せと下知有るに、兵後へ飯り其巽の方鷹嘴山と言ふ所まで引揚げり。爰に陣を張停り蔓音競矢を放つより終に矢は盡きて軍兵は太刀を抜揃ひ、秋の芝之風に靡く如く今や魔神よ來らば切つて棄てんと必死の勢に、彼の黒雲は宙天に昇り夜は仄々と明渡り夫より軍勢は引揚ん迎里人に矢拾ひを命じたり。矢は十月の枯葉を敷たる如く此邊は田畑原野一面に多き矢敷居た